

混和会とは、共に許し合いながら、他の人格を尊重し、共に生きる和の構築を目指し集いです。

# ほとけの 混和会だより

令和三年十二月  
東光院  
仏の混和会  
第156号

檀信徒の皆様にかかれましては益々ご清祥の事と拝察申し上げます。  
コロナウイルスも漸く収束の兆しが見えて参りました。しかし、まだまだご油断されませんようご用心下さりませ、お祈り申し上げます。



## 人生は悟りを求めての旅

松下電器、現在の「パナソニック」を一代で築き上げた経営の神様！松下幸之助さんの言葉に「迷う」ということは、一種の欲望からきているように思う。ああもなりたい、こうもなりたい、こういうふうに出世したい、という欲望から迷いがでてくる。それを捨て去れば問題はなくなる。と言っておられます。捨てたいとは思いつつも捨てられないのが欲望。仕事に関する事、人生に関する事など、いろんな壁にぶち当たったりながらも生きていく上で切っても切り離せないのが欲望でありおのずと生まれてくるのが「迷い」です。

私達は己に対する欲望から迷いの境地をさまよひ、時にはうつ状態に陥りながら人生を歩んで行きます。すると有る時、物事は全て「空」である状態が無い、自我の世界に自ら苦しみを造っているに他ならないと言ふことが見えて参ります。しかし、欲望を全て捨て去って植物人間のような無表情では、生きる喜びも感動も得られません。ましてや己の欲望を振り回す行動、このエネルギーのほどころが無いと犯罪を招いたり精神的にも不安定に成って健康にも良くありません。



そこでブツダは欲望を振り回すエネルギーの転換方法として慈愛心を育む菩薩としての生き方を説いて下さいました。最澄様も「己を忘れて他を利用するは慈悲の極みなり」と言っておられます。このように己に対する欲望を他に振り向けて、他の幸を願ひ他の幸を喜びとする。その行為に對して一切見返りも感謝も求めない無条件の愛を「慈悲」と言っておられます。このような御心を抱かれた菩薩様、これが観音様です。

私達も菩薩として、観音様の慈悲の御心をまねて慈愛心を会得したい物でございます。このような観音様の御心をまねて人生を歩んで行きますと知らず知らずの内に人と人が寄り添う和ができて参ります。共に慈愛心を育み、他の幸を願ひ他の幸を喜びとする集い、これを「サンガ」と言います。仏教を信仰する上において最も尊い三つの宝「仏・法・僧」これをインドの言葉で「ブツダ・ダルマ・サンガ」と言います。この三宝とは  
仏・「ブツダ」大自然大宇宙  
法・「ダルマ」大自然大宇宙の営み、又その真理。  
僧・「サンガ」この真理の元に、共に慈愛心を育むよりどころ。

この「サンガ」を私は、「自然と私達、そして人と人、共に寄り添うよりどころ」と表現しております。

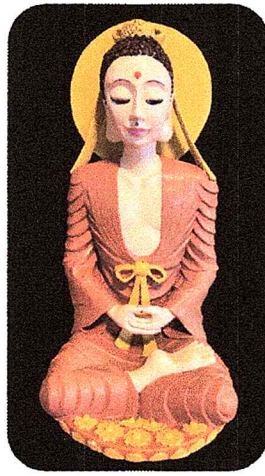
このようなサンガを築く事が出来たら、人生の悟りの旅も容易に歩みやすく、生きる事の意義や安心、そして大きな喜びも見いだす事が出来る物と思われれます。

今後も農作業を通じて自然と共に生きる「サンガ」の構築に努めて参りたいと存じます。

亮観拜合掌



前号にてご報告されまし  
た長年手作りの仏像を奉納  
して頂いた横尾忠様。  
秋の彼岸前、ご家族様よ  
り工房に残されていた最後  
の仏像を二尊御奉納されま  
した。今回はこちらの仏様  
をご紹介します。



● 釈迦如来 じょういん  
しゃかによらい

こちらの仏様は定印  
と呼ばれるお釈迦様が悟  
りを開く際の印(手の形)  
を組まれており、その事  
から修行中の「釈迦如来」  
であると思われます。  
この様なお釈迦様が悟  
りを開く以前の仏様を  
「過去仏」といいます。  
言わずもがな時間の流  
れは過去・現在・未来へと  
絶え間なく変化し続けま  
す。  
仏教ではこれを三世と  
呼びその時代に存在する  
仏様を過去仏・現在仏・  
未来仏といっています。



● 弥勒菩薩  
みろくぼさつ

一方、装飾品や右手を  
頬に着け瞑想をし、左手  
を地に着け魔を払う仕草  
からこちらは「弥勒菩薩」  
であると思われます。

彌勒とは「慈悲」や「友  
情」というインドの言葉が  
由来であり、お釈迦様の  
死後五六億七千万年後こ  
の世に産まれ出て人々を  
救済してくださる事を約  
束された「未来仏」です。

今となっては忠様がど  
の様な意図でこの二尊を  
製作されたのか解りませ  
んが「現在仏」がいない事  
から、変える事の出来ない  
過去。誰も解らない未来  
は仏様にお任せし、各々  
が今出来る事を一生懸命  
に勤め生ききる様に。一  
隅を照らす」というメッセ  
ージなのではと私は思いま  
した。

文末となりましたが、  
忠様への感謝の意と  
ご冥福を心より  
お祈りいたします。



「焚くほどに  
風が持ってくる



越後の良寛

落ら葉かな

江戸時代、長岡藩九代藩主  
牧野忠精は良寛さんの人柄  
を慕い、良寛様のために城下  
に寺を建ててそこへ迎えたい  
と懇請されました。

しかし、清貧に生きる事を  
宗とする良寛様は、お米を炊  
く薪は落ち葉で充分です。  
それ以上は望みませんと丁重  
にお断りされたのでした。

「カーボンニュートラル」良寛  
様の「足を知る」生き方、少し  
でも近づけたらと思います。

われただたるをしる  
心豊かに吾唯足知



おそばの収穫風景

十一月十四日に小学生の娘と  
娘の友人親子でおそばの収穫に  
参加しました。天気にも恵まれ  
日常のストレスも発散できてとて  
も清々しい気持ちに成りました。  
子供達は家の中でゲームやスマホ  
で過ごす中、今回の体験はとても  
貴重で良かったと思います。

周りの大人のみに鎌の使い方を教  
えて貰ったり、又カエルやバッタな  
ど追いかけたり、とても楽しんで  
いました。又おそばの収穫をして  
いたらジャガイモが出てきて子供  
達は夢中になってました。

今回のおそばの収穫で沢山の人の  
たちと協力して行う事の喜びを  
学ばさせて頂きました。子供達を  
含めなかなか経験できる物ではな  
いので皆様のご厚意ありがとうございました。  
謝申し上げます。 鈴木知子